

2015年

新入生にすすめる本

日本赤十字九州国際看護大学

教員によるブックガイド

本学の先生方が新入生の皆さんに薦める図書のリストです。
古典から新刊まで、知的な刺激に満ちた本が紹介されています。

*本学のホームページ (<http://www.jrckicn.ac.jp/>) にも掲載しています。

教員名	書名	編著者名	コメント
学長 浦田 喜久子	武士道	新渡戸稲造/著： 矢内原忠雄/訳	本書は、1899年(明治32年)アメリカ滞在中の新渡戸稲造が、日本の道徳価値について海外の人々に知らせるために著したものです。日本でも翌年翻訳が出版され、その後、英語以外の多くの言語にも翻訳されました。日本の長い封建制度の時代に培われた武士道が、日本人全般の日常に生きる信条となって実践されていることを、ヨーロッパの歴史、宗教、文学から類例を引いて説明しています。やや難解なところもあるかもしれませんが、今も日本人の中に生きている道徳観を改めて意識すべく、是非挑戦していただきたいと思います。
	愛するということ	エーリッヒ・フロム /著：鈴木 晶/訳	本書は、ドイツの精神分析学の学者であるフロムによって著され、1956年にニューヨークで出版されたものですが、今だに世界中で読み続けられているロングセラーです。日本でも1959年に邦訳の後、版を重ね1991年に新訳版が出されました。フロムは、「愛、それは人間の実存の問題に対する答え」と言い、親子の愛、兄弟愛、母性愛、自己愛、神への愛等、様々な愛について思索を深めています。愛と現代西洋社会との関係にも触れ、最後に、愛は技術であると、愛の練習について述べていますが、ここには深い哲学があります。どうぞ、読んでいただき愛の哲学を深めてください。
	置かれた場所で咲きなさい	渡辺和子	辛いとき、悲しい時に読めば、明日に向けて明るく生きていこうと元気が出てきます。もちろん、幸せに感じている時でも、これから生きていく上での示唆を得ることができます。渡辺氏の経験を通して、具体的にやさしく述べてあるので、とても解りやすく心に沁みてきます。あなたが、どのような状況でも美しく「咲く」ために読んで欲しいと思います。

教員名	書名	編著者名	コメント
阿部 オリエ	ここ：食卓から始まる生教育	内田美智子、佐藤剛史	とにかく、早く読んでほしい。急いで読んでほしい。読んだら、あなたたちの“生活”が変わると思うから…。生きるという意味で、何が大切かを考えさせられるから…。
	キラリ看護	川島みどり	看護を学ぶ人、中でも、赤十字の看護教育機関で看護を学ぶ人たちには、ぜひとも知っていたきたい、川島みどりという看護者を。
	クレーの絵本	パウル・クレー/絵： 谷川俊太郎/詩	はっきり言って、クレーの絵は好みではない。でも、見るたびに、絵の表情が違って見える。谷川俊太郎の詩は、わからないようなわかるような、そんな詩が多いと思う。でも、とにかくにも心に染み入る言葉が多い。そんな一冊です。気分によって、絵の表情も、詩のニュアンスも変化していくのがたまらない。何気ない時間にポ〜ッと眺める、おすすめの本です。
青木 佳奈	夜と霧	ヴィクトール・E・フランクル/著：池田香代子/訳	新しいページをめくる時、この先どんなことが書いてあるのかなどワクワクする瞬間が好きだ。だから、あまり繰り返し読むタイプではなかったが、あることに気が付いた。本は購入後「すぐ読む」と、その後「少し時間をおいて再び読む」と、「更に期間をおいて再度読む」とでは、琴線に触れる部分や、そこから感じとる風景やメッセージ、読んだ後に自分の中に残る香りが全然違うことだ。同じ本だと勘違いしているのかなど慌てて、作者と題名を確認するほどである。きっと、それまでに積み重ねてきた経験がそうさせているのだろう。また、今、目に留まった部分はその時の自分にとって必要な内容なのだろう。そうすると、単に知性を深めるためだけに読むのではなく、その時の自分にとって必要なメッセージを探するという目的で本を使うのもある意味占いはって面白くないのではないだろうか。
	星の王子さま	サン＝テグジュペリ/作：内藤濯/訳	
	我関わる、ゆえに我あり：地球システム論と文明	松井孝典	
因 京子	セラピスト	最相葉月	今の時代は、何か言いたいと思ったら、聞いてくれる人を見つけなくてもいいらしい。相手も決めずにTweetすれば、その泡がRetweetという波紋になって広がっていくのだそう。また、何か知りたいと思っても、どこに行ったら教えてもらえるかと悩まなくてもいいらしい。検索エンジンに一言二言書き込んでボタンを押せば、それらしい情報が手に入る。しかし、それは何かを知ったことになるのか。何かを発言したことになるのか。その区別すらもつかない人々は、自分の口臭に気づかない人のようだ。単なる情報、あるいは情報ですらない泡沫と、人が全霊をかけて観察し全知をかけて検証した結果を表現した発信との見分けがつかなくなるには、本物に触れ、弾き飛ばされながら食いついていく体験を積み重ねていこう。昨年読んで感銘を受けた左記のノンフィクションを推薦する。特に、患者の精神面への援助ができるようになりたいと思う人々は、最相作品は必読。
	ジャスミンの残り香：「アラブの春」が変えたもの	田原 牧	
	差別と教育と私	上原善広	
福間 康子	チーズはどこへ消えた？	スペンサー・ジョンソン/著：門田美鈴/訳	現状に安住することなく、常に変化する社会に機敏に対応し、勇気をもって行動を起こすことの大切さを示唆した物語である。迷路の中に住む2匹のネズミと二人の小人は大好きなチーズを食べ過ぎて暮らしていたが、ある日そのチーズがなくなってしまった。消えてしまったチーズを求めてこの2匹と二人は4者4様の行動をとる。今のあなたならどれに該当するだろうか？因みに「チーズ」は私たちが求める富や仕事を、「迷路」は私たちが住む社会や職場を象徴している。実にシンプルなストーリーの中に多くの教訓が示されている。
	脂肪の塊	モーパッサン/著：青柳瑞穂/訳	モーパッサンが1880年に発表したフランスの短編小説、彼の出世作である。晋仏戦争を舞台に「ブル・ド・スイフ＝脂肪のかたまり」とあだ名される娼婦と彼女を取り巻く貴族や実業家、修道女などを通して人間のエゴイズムと偽善、身分差別や自己保身が見事に描かれている。終盤ラ・マルセイエーズが流れる中、屈辱に耐えかねたブル・ド・スイフの嗚咽が何とも痛ましい。
福本 優子	ケアの本質：生きることの意味	ミルトン・メイヤロフ/著：田村真、向野宣之/訳	私が大学1年生のときに出会った本です。看護者が対象をケアしようとするとき何が大切か、必要なことは何か、そもそも看護の対象である人間とは何か、について考える機会があり、その時に読んだ本です。『ケアの本質』は、看護師になってからも読み返し、専門職で在り続けることができるように振り返るときに使っていました。『狼に育てられた子』は、カマラとアマラの養育日記を読んでいくと、ヒトが人間になる過程を理解できるかと思います。わかりやすい言葉で書かれていますので、看護者を目指すみなさんにはぜひ一度読んでほしいと思います。
	狼に育てられた子：カマラとアマラの養育日記	J. A. L. シング/著：中野善達、清水知子/訳	
	レポート・論文の書き方入門	河野哲也	

教員名	書名	編著者名	コメント
福島 綾子	自閉症の僕が跳びはねる理由	東田直樹	自閉症の東田さん自身が、自らの気持ちをつづった本です。相手のことを知ることがとても大切なのだと、改めて考えさせられました。22歳になった東田さんの書いた『跳びはねる思考～会話のできない自閉症の僕が考えていること～』もおススメです。
	流星ワゴン	重松 清	何気ない一言、あの時こうしていれば・・・人生の分岐点は気づかないほどに自然に過ぎ去っていることが多いと思います。大学生活は長いようで短いです。だからこそ「今」を大切に、いろんなことにチャレンジしてもらいたいです。(今年はドラマ化もされました。)
	感情と看護：人とかかわりを職業とするこの意味	武井麻子	この本との出会いが、私の看護観を変えました。看護は感情労働です。患者さんの気持ちに寄り添うこともとても大事ですが、まずは看護師自身が自分の気持ちを素直に表現できるように、互いに気持ちを語り合えるようになりたい、そしてもっと看護師のことを知ってもらいたいと、この本を読むといつも思います。
後藤 智子	検事の本懐	柚月裕子	弁護士佐方真人の検事時代を描いた短編集。彼の信念は、犯罪の背後にある動機を重視し罪をまっとうに裁かせること。孤高な彼はぶれない。そして救うべき人々の心を救う。秋霜烈日バッジをつける検事のあるべき姿だと思えてくる。趣の異なる5編は人間ドラマとしても魅力的である。
	わたしの渡世日記	高峰秀子	昭和の大女優「高峰秀子」の一代記。子役から女優、そしてエッセイストとなった著者に興味を抱き読み始めた。複雑な家庭環境、養母との長年に亘る確執など、その人生の波瀾万丈さに驚いた。痛快な書きぶりに、あつという間にその世界に引き込まれ、読後は爽快感と元気をもらえる。
	ジーキル博士とハイド氏	ロバート・ルイス・ステューヴンソン/著：村上博基/訳	約130年前に発表された古典。かつて児童書で読んで以来、原書翻訳を読むことなく二重人格を取り扱っている話だと思ってきた。改めて読むと、人間の二面性や苦悩について別の見方ができる。変貌したハイドの姿も意外だった。映画化・戯曲化で有名になった作品だからこそ一読の価値がある。
濱元 淳子	外科の夜明け：防腐法-絶対死からの解放	J・トールワルド/著：大野和基/訳	麻酔が存在しなかった150年ほど前の時代、患者は苦痛のあまり絶叫しながら死んでいった。その後、吸入麻酔が開発されたが、術後の傷口の処置が不完全なため、患者は感染症をおこし、悪臭の中、死んでいった。この本には、麻酔手術が成功するまで、そして感染症を克服するまでの医師と患者の苦悩が生々しく描かれている。医師たちに次々に襲いかかる困難と、それらの克服。現代医学の先駆者たちの話。
	海と毒薬	遠藤周作	引越した家の近くにある医院へ、持病を治療しに通う男性。男性はやがて、その医院の医師が、かつての解剖実験事件に参加していた人物であることを知る。この本は、捕虜となった米兵が臨床実験の被験者として使用された事件を題材とした小説。遠藤周作はこの小説で、その手術に立ち会った医師や看護師の罪の意識に迫っている。どうして、その手術に参加することを断れなかったのか？ 関係者の心情が、ぞくぞくと心に迫る表現で語られている。
	グッドラック	アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス/著：田内志文/訳	この本は、世界50ヶ国19言語で出版され、読んだ者を成功に導く本である。読み進むうちに、今までの考えがすっかり変わってしまう小説。自分の人生は自分にしか作ることはできないし、また、幸運というものは、自ら動かない限りは決して訪れない。地道に努力し、下ごしらえをすれば、必ず成功にたどりつくと思わせてくれる。この本を読んでから、「今日すべきことは、今日中にする」を心に誓った。
原田 紀美枝	犬たちの明治維新：ポチの誕生	仁科邦夫	歴史資料の犬関連の記述を集め、幕末明治を犬たちがどのように過ごしてきたのかをまとめた1冊です。私が子供のころは、野良犬を拾ってきて番犬として飼う時代で、多くの犬がポチと呼ばれていました。しかし、今は家族の一員として、家の中で生活し、素敵な名前を付けてもらい人間より贅沢をしている犬たちもいます。人だけでなく動物も時代とともに変化するなあとは色々なことを考えながら楽しく読み進めていけます。
	どんな問題も「チーム」で解決するANAのログゼ	ANAビジネスソリューション	ANAの職員が仕事の時によく使う「ログゼ」がまとめられています。チームを円滑に運営していくためにとても参考になる「ログゼ」です。航空会社も、病院と同様に多くの職種の人々が働いている組織です。患者様の安全とお客様の安全など医療従事者と同じ目線で考えることができることもたくさん含まれています。「仕事場はあなたのステージです。制服を着た瞬間からサービスは始まっている」皆さんにも使えるログゼです。
	ザ・ギフトィッド：14歳でカナダのトップ大学に合格した天才児の勉強法	大川 翔	5歳の時にカナダへ移り住み、9歳でカナダ政府に天才児認定をされ、12歳で中学を飛び級して高校に入学した著者が、学んできた方法が書かれています。学習すべきことが増えてくると、多重課題に押しつぶされそうになります。そうなる前に、この本を参考に自分なりの課題の攻略法を考えてみてはいかがでしょうか。

教員名	書名	編著者名	コメント
エレーラ カディジョ ルデス ロサリオ	医者のないところで： 村のヘルスケア手引書	デビッド・ワーナー/ 著：キャロル・サマン、 ジェーン・マックスウェル/ 協力：河田いこひ/訳	日本でも医者がいないところが増加している。医者がいなくて慢性病や感染症の予防、薬剤の使用法、代替医療、母子保健など、コミュニティボランティア、ヘルスワーカーや地域住民による活動を支える一冊。日本語版も英語版もインターネットにて無料ダウンロードできます。
	砂漠の女ディリー	ワリス・ディリー/著： 武者圭子/訳	ソマリア遊牧民出身少女の現実物語。著者ワリス(スワヒリ語で砂漠の花)が5歳でFGM(女性性器切除)を受け、13歳で60代男性との結婚から逃れるために砂漠に走り出し、様々な困難を乗り越え、数年後ヨーロッパでスーパーモデルになった。文化と慣習について考えさせる本です。
	Leave no nurse behind : nurses working with disAbilities	Donna Carol Maheady	障がいを持ちながら医療現場で働く看護師、障がい者に看護を提供する看護師のための本です。障がいがあっても好きな職業に就き、夢を叶う。障がいの有無に関わらず、異なる価値観や考えを有した多様な人材が活躍できる社会につながる。多様性に関心がある学生にお勧めします。
姫野 稔子	『歩行』と『脳』：生きる力 と心もよう	吉田勸持	物理学者としてNASA(米国航空宇宙局)の高エネルギー研究に携わり、理学博士、医学博士である著者が、歩行という動作が人間にとっていかに生理的かといったことを脳の形成や血圧、心拍数といった科学的根拠に基づいて理論を展開している一冊です。
	ペコロスの母に会いに行く	岡野雄一	認知症のためグループホームに入所している89歳の母に、62歳の息子(著者)が会いに行く日常を、4コマ漫画風に描いています。母親の記憶が低下する過程によって生じる様々な現象について、子供としての視点と客観的な視点の両方でとらえており、漫画でなければ表現し得ない認知症の方の表情や間というものを見事に描写しています。こんなことが起こるのかと驚く反面、何かほっこりした気持ちにもなる不思議な本です。認知症の方の世界をどうとらえ、理解し、かかわっていくのかというテキストといっても過言ではない2冊です。
	ペコロスの母の玉手箱		
北條 智子	理科系の作文技術	木下是雄	大学では、講義や実習での学びをレポートにまとめる機会が多い。論理的に思考し文章化することが求められるが、自らの考えを簡潔で読み手が理解できるように伝えることは非常に難しい。本書は、明快・簡潔な表現を追求し、目標を定め論理的に文章化する際の具体的な方法が述べられている。レポートを書く前に、是非熟読してほしい一冊である。
	アントン：命の重さ	エリザベート・ツェラー/ 著：中村智子/ 訳	本書は、第二次世界大戦中ナチス政権下にあったドイツで「生きるに値しない命」として障害のある子どもや精神に障害がある人を計画的に殺害した歴史上の出来事をもとに書かれ、ナチス政権に屈することなく、希望を持ち生き抜いた障害児アントンと家族の物語である。いじめや差別、虐待が常に存在する現代社会に生きる私たちに、命の重さとは何かを改めて考えるきっかけを与えてくれる一冊である。
	こころの病を生きる：統合失調症患者と精神科医師の往復書簡	佐野卓志、三好典彦	本書は、統合失調症患者と主治医である精神科医が往復書簡を交わすことで、互いに「こころの病気」について率直に語り合い、ともに成長していくプロセスを描いている。目に見えない病気と言われる精神疾患を理解する上で、まず患者の体験世界を知り寄り添うことが重要であると教えてくれる一冊である。
本田 多美枝	エースと呼ばれる人は何を しているのか	夏 まゆみ	米国でダンサーとして活躍した著者は、振り付け師として日本の芸能界でも活躍。その中で、成功する人たちをみて共通の資質や物事への取り組み方を見出した。AKB48との関わりではセンターとエースの違いを語っている。アイドルや芸人の実名を使って表現しており、具体的にイメージする事ができ、あらゆる社会にも適用できる内容になっている。
	絶体絶命でも世界一愛される会社に変える!：2代目女性社長の号泣戦記	石坂典子	誤った報道でバッシングを受け、存続が危ぶまれる産廃会社を立て直した女社長の話。4割の社員が立ち去ってもぶれる事なく突き進み、周囲を里山化した結果、養蜂困難なニホンミツバチが住み着き、ホテルが舞う環境にまでなった。誤った産廃事業への周囲の認識を変えるまでに至り、世界中から見学が絶えない。勇気と決断の大事さを教えてくれる感動の話である。
	親ができるのは「ほんの少しばかり」のこと	山田太一	著者は、特に家族問題に関する多くの映画やドラマ、舞台で有名な脚本家である。本の中では、自分の子どもを他者として認め、敬意を払いつつも、緩やかに関わり導くすべをやさしい口語調で表現している。親として読む価値のある本ではあるが、一方子どもの立場でも、加えて社会人全体にも示唆に富む内容になっている。
石川 勝彦	ことばが劈かれるとき	竹内敏晴	著者は聡明なフランス哲学者、演劇家、身体論者の顔をお持ちなのですが、生まれながらに耳が聞こえませんでした。この著書は、著者が聴覚を取り戻すまでとその瞬間を、身体論を背景にしてドラマティックに描いています。ことばとはなにか、身体とどのように絡みあうのかをぜひ知ってください。
	修業論	内田 樹	何をやってもうまくいかない、ものごとがすすまない、ってときありますよね。それは身体がストレス源に捕われ、対応力や柔軟性を失っている状態で、武道では「居着き」と呼ばれるそうです。苦しい時はこの本を読んで、しなやかに生きるためのロジックを学んでください。
	知覚の呪縛	渡辺哲夫	統合失調症患者は、妄想や幻聴の世界を生きており、他人には彼らの発する言語は難解に響き患者の内面は謎めいてみえます。この本は著者が患者の言葉に真摯に耳を傾け続け、ついに患者の言語世界の理解にたどり着くまでの過程を描いています。「他者理解」の究極の形がここにあります。

教員名	書名	編著者名	コメント
石山 さゆり	ヒトの意識が生まれるとき	大坪治彦	ヒトの意識はいつから生まれるのだろうかという素朴な疑問を早産児の研究をきっかけに追求した著者が記した1冊。ヒトの意識はすでに胎児期からあるという胎内の認知システムを明らかにした本はすべての人に読んでほしい本です。
	人生の基盤は妊娠中から3歳までに決まる：人生でいちばん大切な3歳までの育て方	白川嘉継	私が胎児の研究を進めていくうえで一番強く思っているのは「胎児はすでに立派な人間であり、母子の絆づくりは生まれてからでは遅すぎる」ということです。そのように考えていた矢先出版されたのが本書です。看護学生としても、これから子供を授かり、育てていく皆さんにぜひ読んでほしいお勧めの本です。著者は福岡県の小児科医です。
	子供の「脳」は肌にある	山口 創	肌に触れることの意味、効果について身体生理学者が記した書です。肌に触れることは、心、体、頭の発達に影響するという目からうろこの内容です。意識、無意識に限らず肌に触れる機会の多い看護職必読の書です。
金丸 多恵	私は誰になっていくの？：アルツハイマー病者からみた世界	クリスティーン・ポードン/著：桧垣陽子/訳	アルツハイマー病患者が自らの体験を綴ったこの本を私が手にしたのは、学生時代に実習で認知症の患者さんに出会ったことがきっかけでした。この本は私の認知症に対する見方を変えてくれました。この病気の患者は物事の理解が難しくなるという大雑把な理解から、この病を患った人にもそれぞれ特有の独自の内面世界があるのだということに目を開かれました。
	バカの壁	養老孟司	自分が当然だと考えていることが実は違うこともある。様々な経験の中で自分が感じ得たものを人と共有できますか。この本は自分のものの捉え方について改めて考えさせられた本です。
	わたしはマララ：教育のために立ち上がり、タリバンに撃たれた少女	マララ・ユスフザイ、クリスティーナ・ラム/著：金原瑞人、西田佳子/訳	史上最年少でノーベル平和賞を受賞した少女の本です。マララさんは教育の重要性を世界に訴えています。みなさんは大学でどんな学修をされるのでしょうか。日本では当たり前のようなことでもこの本を読むとはっとさせられることがたくさんあります。
清末 定美	バカの壁	養老孟司	東京大学名誉教授で解剖学者である養老孟司さんの本です。表題にある「壁」は、自分が知りたくないことについて自主的に情報を遮断している状態のことを言います。話が通じない、分かり合えないという状態は「壁」であり、紛争や宗教対立の根源となっています。人間社会における壁、自分自身の壁、これを除けばどうなるのかを、時事問題を中心に述べられており、自分だったらどう考えるかを問うています。時々出てくる脳や身体の話も解剖学者ならではの解説があり、興味深いものです。
	「自分」の壁	養老孟司	
	奇跡のリンゴ：「絶対不可能」を覆した農家木村秋則の記録	石川拓治	木村秋則さんの無農薬リンゴ栽培の8年間の軌跡を書いたものです。信念をもって試行錯誤で無農薬リンゴ栽培に取り組む姿が、本人へのインタビューを通して描かれています。物事に真摯に取り組むことの大切さが記録されており、学びにおいても人の成長においても基礎が大事であることを気付かせてくれます。
小林 裕美	「死」の博学事典	荒俣 宏/監修	すべての人に死は避けられないが、医療従事者である看護職にとっても避けられない死の話題である。しかし、社会における死、医学における死、心理学・精神医学、宗教・哲学、生物学など多方面から死を紹介しており、重い話題でありながら読みやすい。ターミナルケアの専門書に入る前にお薦めしたい。
	石川「地理・地名・地図」の謎：意外と知らない石川県の歴史を読み解く！	実業之日本社/編	私の出身県のお国自慢をしたくてこの本を紹介する。なぜ金沢県でなく石川県なのか、金沢の台所の近江町市場の謂われなど出身者でありながら知らない事が満載であった。紅白の鏡餅なのは石川県だけだという。白山や加賀温泉郷の魅力なども紹介されているので、金沢に行く機会がある人はその前後に読んでほしい。
	沈まぬ太陽	山崎豊子	主人公が日航機墜落事故後の対応をするところが主に映画化されたが、主人公が労働組合で職場環境の改善に奔走した結果、長期間海外勤務を命じられ、中東やアフリカでの生活を描いた箇所が非常に印象深い。小説全体としては、個人の尊厳や生命までも疎かにした日本の企業の体質や裏側を描いている。
小手川 良江	舟を編む	三浦しをん	この本は、一つ一つの言葉を大切に扱い、15年の歳月をかけて真摯に向き合い辞書を編纂するまでの物語です。私にとっては、日々の中で安易に使っている言葉について考えるきっかけになりました。また、目的に向かって一途に努力する姿に感銘を受けました。自分の強みや取り組み姿勢についても考える機会になる本だと思っています。
	看護を語ることの意味：“ナラティブ”に生きて	川島みどり	看護職を目指すために、これから様々なことを学び体験していきます。その時に自分が感じたこと考えたこと体験したことを語ってもらいたいと思います。この本は語ることの意味だけでなく、語られた内容が記載されています。看護について考える時のヒントにもなると思います。
	植物図鑑	有川 浩	この本は、様々な植物を採取して調理して食べながら恋もするという物語です。皆さんが学ぶこの宗像の地は緑が多く、この本に登場する植物の多くを見ることができます。本を読んで、実際の植物を見て、時には味わって、宗像を五感で楽しんでいただきたいと思っています。

教員名	書名	編著者名	コメント
増山 純二	チーム ステップス日本版 医療安全：チームで取り 組むヒューマンエラー対策	東京慈恵会医科大学 附属病院医療安全 管理部	少子高齢化社会によって、高齢者医療費が増え続けており、できるだけ早く地域、在宅ケアに移行することが求められている。また、安全で安心な医療を効率的、効果的に提供することが強調されている。医療安全は最重要課題であり、安全な医療の提供は、すなわち患者にとって安全という意味から“patient safety”という概念が強調されている。そのためには、医師、看護師、だけではなく、臨床検査技師、診療放射線技師、薬剤師など多くの医療職の連携が必要不可欠とされている。医療者—患者間、医療者間のフラットな関係による「協働」が必要とされ、医師、疾患中心主義ではなく、患者、問題中心主義へと変わった今、専門性を最大限発揮でき、しかも協力体制の整った医療制度として、チーム医療を発揮しなければならない。このようなチーム医療の概念から、チーム医療の実際まで解説している本を3冊紹介する。
	チームマネジメントの知識 とスキル：多職種連携を 高める	篠田道子	
	「チーム医療」とは何か： 医療とケアに生かす社会 学からのアプローチ	細田満和子	
森山 ますみ	ソロモンの偽証 (第1部～第3部)	宮部みゆき	Wehbe L氏らは、機能的磁気共鳴画像装置を使って、フィクションを読んだ時に反応する脳の部位は同じ出来事を実際に体験した時に反応する部位と同じである ¹⁾ ことを明らかにした。すなわち、フィクションを読むことは共感力の向上に関連している。フィクションを読もう。本書は文庫全6巻と驚きの分量だが、巧みな語り口で書かれた物語の世界に引き込まれ、読み始めるとページを捲る手が止められなかった。大雪のクリスマスの日、14歳の中学生男子の謎の転落死、自殺？殺人事件？事故？目撃者を名乗る匿名の告発状、マスコミの過剰な報道、犠牲者は増え、教師たちは保身に走る。そんな大人に見切りをつけた中学生たちが真実を暴くために自ら事件を調べ、学校内裁判を開廷した。有罪無罪とは直接関係のない、事件の背後にあるさまざまな真実を明らかにしていく物語である。検事、弁護士、判事、裁判員役の中学生はみな本物のように役割を果たし、読後感は爽やかなものだった。 1) Wehbe L etc(2014). Simultaneously Uncovering the Patterns of Brain Regions Involved in Different Story Reading Subprocesses, PLOS ONE
村上 淑	Alice's adventures in Wonderland, and, Through the looking-glass	Lewis Carroll	ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』と言えば、誰もが知っている児童文学であるが、あらためて大人の視点で原作を読むと、そこには英語圏の人々を知る上での多くのヒントが隠されている。例えば、登場人物たちの一見何気ない会話の中には論理的に理屈を語る場面があったり、物事の是非を問う際には裁判で公正に決めようとしたり、そこには日本人的な考え方は異なる思考や行動がみられる。更に英語圏の子供達には馴染み深い『マザーグースの詩』をベースとした物語設定や言葉遊び(韻を踏んだ駄洒落など)が随所に現れ、ウィットに富んだ作品となっている。原作を英語で読むことの醍醐味は、物語本来の面白さを直に味わえることであるが、同時に、言葉の背景にある多様な文化や価値観までも学べることである。
中平 紗貴子	考える練習をしよう	マリリン・バーンズ/ 著：マーサ・ウェスト ン/絵：左京久代/ 訳	子どものための～とありますが、むしろ大人が読んでもいい本だと思います。語りかける口調でとても分かりやすいです。考えるとはどういうことなのでしょう？文中には、練習問題がたくさん出てきます。P54を見た時、皆さんには何が見えるのでしょうか。考えることを考えてみてください。
	嫌われる勇氣：自己啓発 の源流「アドラー」の教え	岸見一郎、古賀史 健	題名にひかれて読んでみようと思いました。青年と哲人との掛け合いで話は進んでいきます。青年が言う内容は私も同感できる部分が多いと感じました。ただ、哲人の意見をきくと、言われていることは分かるが今まで避けてきたような気がしました。要は嫌われる勇氣は自分自身の勇氣の問題ですね。この本はアドラーの心理学を基に書かれています。物事の見方には色々な視点があるものですね。
	死ぬ瞬間：死とその過程 について	エリザベス・キュー ブラー・ロス/著：鈴 木晶/訳	看護職になると、人の死に立ち会う場面も多々あります。その瞬間までに、人はどんな過程を経るのか。死が身近に迫っている方々の言葉が印象的でした。私はそういった患者さんに対して、そこまで考えられていたのだろうか。もし自分が死に直面した時、そんなに冷静になれるのかと思った場面もありました。皆さんはどう思うのでしょうか。
西野 秀昭	モラルの起源：道徳、良心、 利他行動はどのように 進化したのか	クリストファー・ボーム/ 著：齊藤隆央/ 訳	進化論・動物行動学・考古学・霊長類のフィールドワーク・狩猟採集民の民族誌等、様々な知見を多角的に駆使し、人類最大の謎に迫りつつ、類人猿との比較から、人間社会のこれまでの過去やこれからの未来を考える一つの縁を提案している。
	ぼくは物覚えが悪い：健 忘症患者H・Mの生涯	スザンヌ・コーキン/ 著：鍛原多恵子/訳	てんかん予防のための脳手術から目覚めたH・Mことヘンリー・モレゾンは、別の深刻な障害を負うことになった。手術後、新しい事を何ひとつ記憶できなくなっていた。しかし、多くの医師が医学史上、非常に珍しいこの患者に注目し、彼の脳及びその症例が、様々な視点や手法で分析され、その成果は精神医学分野を根底から刷新した。
	双子の遺伝子：「エピジェ ネティクス」が2人の運命 を分ける	ティム・スペクター/ 著：野中香方子/訳	本書は、「双子がどれだけ似ているか」ではなく、「なぜ双子は、同じ遺伝子を持ちながら、あんなにも違うのか」に注目する。その謎を解くカギは、遺伝子の「スイッチ」にある。メンデル遺伝以来の発見、「エピジェネティクス」と、「遺伝子スイッチ」の考え方を解説している。

教員名	書名	編著者名	コメント
乗越 千枝	犠牲(サクリファイス): わが息子・脳死の11日	柳田邦男	生きていること、死んでいくこと、この世に存在すること…、自分自身についてと出会う人々について思い巡らし考えるきっかけとなる書籍だと思います。人として逃れられない苦しみの世界で生きていくのは大変なことですが、なるべく明るい方に向かって生きていけると良いなと思っています。紹介した書籍は看護観を形成していくために、もちろん為になる本ですが、自分のこれからの人生や生き方を考える上でも役立つのではないのでしょうか。人生や生活については小さな枠にとどまらずに考えていきたいと思っています。
	「聴く」ことの力: 臨床哲学試論	鷲田清一	
	ケアの本質: 生きることの意味	ミルトン・メイヤロフ/ 著: 田村 真、向野宣之/訳	
小川 里美	戦後日本の看護改革: 封印を解かれたGHQ文書と証言による検証	ライダー島崎玲子、大石杉乃	第二次世界大戦後、日本の看護教育制度、看護師制度がどのような過程を経て変革されたのか、貴重な資料をもとに記載されています。看護を学ぶにあたり、是非、一読してほしい書物です。
	Medic: the mission of an American military doctor in occupied Japan and wartorn Korea	Crawford F. Sams	GHQ公衆衛生福祉局局長のサ姆斯医師は、戦後の日本の公衆衛生改革の責任者であり、わが国の医療サービス・医療・看護の質向上のために尽力しました。彼がみた終戦直後の日本の公衆衛生事情とGHQの取り組みが記載されています。是非、「戦後日本の看護改革」と対比させて読んでもらいたいと思います。
	世界から猫が消えたなら	川村元氣	末期癌を宣告された主人公が、自分の身の回りのものを1つ消すことで死の期限を1日ずつ延ばすという交換条件を悪魔と結び、その過程で時間や物事の価値、人間の存在意義を問う話です。優しく軽いタッチの描写ですが、深く考えさせられる内容です。
大貝 知子	宇宙船ビーグル号	A.E.ヴァン・ヴォクト/ 著: 浅倉久志/訳	巨大な宇宙船が、多くの専門家を乗せ惑星や青雲の探検に旅立つ。そこには、暗黒の深淵に生息する恐るべき能力を備えた異種の知的生命体との死闘が待ちかまえていた…と書けば、血湧き肉躍る冒険物語だ。確かに抜群に面白い。だが、注目すべきは「情報総合学」という概念である。彼は、歴史の浅い学問ゆえに乗組員に軽視されつつも、学際的に知識や技術情報を収集し、総合化することで正しい解決法を見出してゆく。小さな疑念を手がかりに真相に迫る手法と、徹底的に専門家を使いこなし対象を捉える方法は、すべての物事に通じる技術であろう。知的興奮と冒険を同時に味わい、問題を見出す力と解決の道を探る姿勢に触れて欲しい。
	歌う船	アン・マキャフリー/ 著: 酒匂真理子/訳	これは少女の成長物語である。だが、並の人ではない。「シェル・ピープル」と呼ばれるサイボーグとして、宇宙船の体を持つ少女である。重度の奇形に生まれついた体をチタニウムの殻に包み、彼女は強大な宇宙船の能力と知識を駆使する。だが、殻の中は生身の人間であり、人一倍豊かな感情がある。中央諸世界の医療局所属「ブローン・ブレインシップ(筋肉・頭脳船)」として、人間であるブローンを相棒として任務を遂行しつつ、彼女は嘆き、悩み、苦しむ。どんな仕事にも真剣に取り組み、人に愛情を注ぎながら成長する彼女から、成長に欠かせぬ経験に伴う痛みや喜びは、おざなりに生きる事では得られないという、ごく当たり前のことが、ヒシヒシと伝わってくるだろう。
岡村 純	ゲーム脳の恐怖	森 昭雄	脳神経学者であり、日本健康行動科学会理事長も務めた森昭雄氏の『ゲーム脳の恐怖』(生活人新書、NHK出版、2002)は、「ゲーム漬け」となっている日本人、とくに若者に読んでほしい書である。テレビゲームへの依存が「人間らしさ」を司るとされる大脳前頭前野の活動を停止状態にする、というデータが示されている。「人間力」が必要とされる看護職をめざす今こそ、ゲームと決別する時かも知れない。
	脳を創る読書: なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか	酒井邦嘉	日本における言語脳科学の第一人者、酒井邦嘉氏の『脳を創る読書: なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』(実業之日本社、2011)は、「紙の本」を読書することが人間の脳の発達・進化にどうして必要なのか、を解き明かした書である。インターネットがすべてだと信じている学生はまず読んでほしい。
	微生物の狩人	ポール・ド・クライフ/ 著: 秋元寿恵夫/訳	筆者が少年時代に愛読した借成社版の完訳本である。細菌学の黎明期において、伝染病の原因をめぐるパスツールとコッホの学問的戦いに手に汗握る臨場感がある。看護職をめざす者の教養の書として、ぜひ読んでほしい。
力武 由美	オリエンタリズム	E.W.サイード/著、今沢紀子/訳	E. サイードは「野蛮な非文明の東洋」VS「文明の西洋」の対立概念に差別的イデオロギーを喝破し、『オリエンタリズム』において東洋趣味の意の「オリエンタリズム」を「東洋を支配し再構成し威圧するための西洋の様式である」と再定義した。オリエンタリズムを引きずる今日の世界に、A. マリクの『郊外戦争は起こらないだろう』は次のような比喩で警鐘を鳴らす。世界から移民や亡命者が流入する空間「郊外」は、グローバル化する地球の捌け口を失ったエネルギーが、まともな危機管理もなされぬままに充満している巨大な「原発」のようなところで、上手に統御すれば国中を照らし出すけれど、放置しておく「原爆」になりかねない、と。グローバル化により私たちは国際の中で相互依存の関係に在る現実を認識し、お互いが責任分担し、「人間らしさに徹して」生き抜いていこうと、緒方貞子著『共に生きるということ—be humane』は伝えている。
	La guerre des banlieues n'aura pas lieu (郊外戦争は起こらないだろう)	A. マリク	
	共に生きるということ: be humane	緒方貞子	

教員名	書名	編著者名	コメント
齋藤 涼子	ぼくはここにいる	ピーター・レイノルズ /作: さかきたもつ/ 訳	自閉症の方のころを知ることができる一冊です。「個性が違うこどもたちの世界について、広く理解してもらいたい」とう作者の気持ちに心打たれました。
	わたしのココロはわたしのもの: 不登校って言わないで	プルスアルハ	主人公「ミク」が体験している世界や気持ちを知ることで、かかわり方のヒントが得られる絵本です。「こどもの気持ちを知る絵本」シリーズの1冊なので、他の作品もぜひ手に取ってみてください。
	大逆転の痴呆ケア	和田行男/著: 宮崎和加子/サポーター	日々認知症の患者様との関わりでジレンマを感じている時に会った本です。冒頭の「私はすべてを失ったわけではありません」という言葉に心打たれました。対象者の気持ちが理解できる本の一冊です。
苑田 裕樹	グッドラック	アレックス・ロビラ、フェルナンド・トリアス・デ・ベス/著: 田内志文/訳	幸運は自分で作り上げるもの。幸運を導くためには自分自身で下ごしらえをする必要があるということ。何か悩んでいるときには忘れていた大切な言葉がこの本にはあります。
	クリティカルケアアドバンス看護実践: 看護の意義・根拠と対応の争点	山勢博彰	高度な診療技術や侵襲的な処置が多く行われるクリティカルケアにおいて、看護師に求められる必須の技術と知識を、豊富な文献・根拠を基に解説。臨床で対応方法に議論のある「クリニカル・クエスト」に、エキスパートが根拠と臨床知をもって「myサジェスション」が提示されています。クリティカルケアのベストプラクティスがわかる一冊です。本学のクリティカルケア領域の先生方も執筆しています。
	ベイツ診察法	リン S. ビックリー、ピーター G. シラギ/ 著: 徳田安春、石松伸一、岸本暢将/監 訳	医療の原点と呼ばれ、世界中で読み継がれてきた最高峰の指南書。上質なケアに必須な臨床技能がわかりやすく解説されています。最優先の書にして一生ものの価値があると思います。この本でフィジカルアセスメントを極めてみませんか？
鈴木 清史	装いの人類学	鈴木清史、山本誠	「衣」「装い」という日常的な事物をめぐり、どのような議論ができるのかを感じる事ができる。また、「文化」という普段何気なく使われている用語が、実は深遠な意味を持つものであることもわかる。出版年が古いのが弱点。
	人はなぜ逃げおくれるのか	広瀬弘忠	2011.3.11に発生した大災害では、多くの人びとが、最初の地震を過小評価した。そのために途方もない規模の人的な損害を被った。人はなぜ逃げないのか？本書は、社会心理学的側面から、その疑問を解き明かしている。
	かくれた次元	エドワード・ホール/ 著: 日高敏隆、佐藤信行/訳	「空間」が、人間の思考や行動にどのような影響を与えているのかを考察した古典的名著である。将来多様な人々との関係の中で専門職者と働くことを望む人々には有益な1冊であろう。
高橋 清美	自閉症の僕が跳びはねる理由	東田直樹	NHKの特集で本著を知り読んでみました。自閉症である著者が中学生の時に描いた作品です。巻末で著者が記したように、自閉症は決してわがままや自分勝手からきているのではなく、他の人々に自分の障害を理解してほしいと願っている、その思いが深いことに気づかされました。
	焦らなくてもいい「拒食症」「過食症」の正しい治し方と知識	水島広子	摂食障害は正しい知識を得ることによって回復への道のりをたどる、と言われていています。わかりやすい解説なので多くの皆さんに読んでいただきたいです。
	ペコロスの母の玉手箱	岡野雄一	認知症の母親を介護する著者の視点で読むと、将来、看護を考えるうえでとても参考になると思います。認知症の主人公が、今にいながら過去を回想する描写が巧みで、読んでいて引き込まれてしまいました。
田中 時穂	地球に生きる: グレートジャーニーのこどもたち = Alive on the earth	関野吉晴	
	老景考: カメラ園長が見せてもらう「老いの世界」	村上廣夫	生まれたばかりの赤ちゃんとその家族、世界の国々で生きる子どもたちとその環境、長い人生を生きてきた高齢者の表情や生活。写真に写る人々の表情やその様子、生活する環境からどのようなことを感じますか？図書館にありますので、ぜひ手にとってみてください。
	NICUのちいさないのち: 新生児集中治療室からのフォトメッセージ	宮崎雅子	

教員名	書名	編著者名	コメント
田中 千晴	ゆるサバイバル入門：身近な危険から自分を守る!	ふじいまさこ	入浴中に大地震が起きたら、あなたはどうしますか？犯罪から自分を守ることはできますか？・・・大規模災害、日常に潜む犯罪から身を守る術が学べます。大学進学を機に一人暮らしをする人も多いと思います。緊急の時に役立つ連絡先も書いてあり、ぜひ持っておくといいい1冊です。
	緊急招集(スタット・コール)：地下鉄サリン、救急医は見た	奥村 徹	阪神・淡路大震災のあった1995年の3月、東京営団地下鉄(現東京地下鉄)で起こった、地下鉄サリン事件を知っていますか？みなさんはまだ生まれていなかったと思いますが、今日の日本でも、同じような化学テロがいつ起こるかわかりません。私の看護師を志すきっかけになったのが、この事件の本でした。事件から今年で20年。その時どんな状況だったのか？看護師である今の自分に何ができるのか？今一度自分を再見すきっかけを作ってくれました。
	アンダーグラウンド	村上春樹	
寺門 とも子	沈黙の春	レイチエル・カーソン / 著：青樹築一 / 訳	最初が、とても惹きつける書き出しで始まっています。中を読んでいくと衝撃を受ける内容が広がっていき、一気に読み進めてしまう本だと思います。私たちの日常に環境問題が関わっていることを実感させられる本です。1960年代に生物学者としてこの本を書いたレイチエル・カーソンはすごーいと思いました。
	八甲田山死の彷徨	新田次郎	昨年、亡くなられた高倉健さんの主演で映画「八甲田山」が取り上げられて思い出した本を紹介いたします。若いころに読んだ記憶に残る本の1つです。日露戦争の時代ですが、実際にあった事件(事故?)をもとに書かれていました。厳寒の八甲田山中で過酷な雪中行軍、2つの隊が同じ課題をどのように運営していったのか、その結果が全く異なるものとなったのはなぜなのか、考えさせられる本です。両隊を対比して、自然と人間の闘いを迫真の筆で描く長編小説、ぜひ手に取ってみてください。
	ペコロスの母の玉手箱	岡野雄一	前年には、『ペコロスの母に会いに行く』を紹介しましたが、今年はその続きが出版されました。ほっとするような温かな描写の漫画とコラムで構成されています。この本は私たちが「認知症」の理解をするのに役に立つ本だと思っています。認知症になったペコロス(小玉ねぎのこと)の母への愛が感じられる内容となっています。2冊続けて読むと認知症の患者さんの経過が見えてきます。ぜひ1年生のうちに読んでみてほしい1冊です。
時枝 夏子	世界で一番いのちの短い国：シエラレオネの国境なき医師団	山本敏晴	私は兼ねてからの夢であった国際協力への思いを胸に、約12年前に本学に入学した。そんな私の夢を、現実のものにしたいと決意を新たにさせてくれた1冊。5歳になるまでに3分の1の子どもが死んでいく。そんな国の小さな命たちを守ろうと奮闘している日本人医師の記録である。
	ラッキーマン	マイケル・J・フォックス	Michael J. Foxといえばハリウッド映画、Back to the Futureシリーズで人気の俳優である。これは、人気絶頂の最中にパーキンソン病を患った彼の闘病記である。長きに亘る苦悩を経て「病気に乗っ取られるのではなく、自分が病気を所有する」という彼の決意に胸が震える。
	21番目のやさしさに：ダウン症のわたしから	岩本 綾	著者はダウン症をもつ女性である。大学を卒業して司書資格をとり、絵本の翻訳などを行ってきた彼女のこれまでを、彼女を支えてこられた方々への感謝の思いと共に、綴られている。「1本多い染色体にはやさしさと可能性がいっぱい詰まっている」という母親の言葉を支えに、果敢な挑戦を続ける彼女の生き方に感銘を受ける。
上村 朋子	アフリカの日々	アイザック・ディネーセン / 著：横山貞子 / 訳	映画「愛と哀しみの果て」の原作。人々に向けて著者のまなざしが秀逸で、アフリカの情景、人々の暮らしが鮮やかに描かれている。
	黙って行かせて	ヘルガ・シュナイダー / 著：高島市子、足立ラーベ加代 / 訳	アウシュビッツの看守になるために家族を捨てた母。再会した母とのやり取りのすさまじさに胸を突かれる思いがする。
	苦海浄土(くがいじょうど)：わが水俣病	石牟礼道子	世界に知られる文明の病・水俣病。患者とその家族の苦しみを自らのものとして綴った「いのちの記録」、同じ九州人として是非読んでほしい。
上野 満里	葉っぱのフレディ：いのちの旅	レオ・バスカーリア / 作：みらいなな / 訳：島田光雄 / 画	生きるとはどういうことか、死とは何かを考えさせられます。美しい写真と水彩の挿絵も魅力的です。
	「待つ」ということ	鷲田清一	現代は待たなくてよい社会、待つことができない社会を19の視点から待つということ問い続けています。日々の生活の中で待つことの意味、豊かさを感じてみたいと思います。
	飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ：若き医師が死の直前まで綴った愛の手記	井村和清	不治の病と闘う青年医師の妻、わが子、両親への思いをつづった遺稿集です。生きること、あたり前の言葉の重さを感じられる1冊です。

教員名	書名	編著者名	コメント
上野 昭治	金子みすゞがうたう心のふるさと	上山大峻	行間が広く字も大きく詩が中心で、ページ数も少なくアツと言う間に読み終えることが出来る。一つ一つの詩をしっかりと噛み締めることにより、他人を思いやる心が豊かになり、勉学・仕事に対するモチベーションも高まるのではないかな……。
	椿と花水木：万次郎の生涯	津本 陽	幕末 土佐の一漁民(中浜万次郎)は、漁に出て嵐に遭い遭難、乗組員(5名)は、運よく絶海の孤島(鳥島)に流れ着いた。約5ヶ月アホウ鳥や魚貝類で命をつなぎ、アメリカの捕鯨船に救助された。その後の万次郎の生き様が良く描かれており、何事にも積極的に取り組む万次郎は、捕鯨船の船長に見込まれ、学問を受け、終いには、日本に帰国……そして、明治維新へと活躍 読んでいくうち、引き込まれ冒険心を引き立たせるのではないかな……。上・下とあり少々長いですが、方言が難しいかも……。
宇都宮 真由子	「死」：宮崎学写真集	宮崎 学	誰もが免れることのできない死。その死の先には何も無いのか。それとも何かあるのか。この写真集が答えをくれます。「死は生の出発点である」この意味を知りたいければ、この本を開いてみる価値はあります。
	ホット・ゾーン：「エボラ出血熱」制圧に命を懸けた人々	リチャード・プレストン/著：高見 浩/訳	「エボラ出血熱」のウィルスがアメリカ・ワシントンに出現し、最高度機密保持態勢のもとに制圧されていたというノンフィクション作品。これが自分の身近で起きたらと思うと鳥肌がたつ内容ばかりの一冊です。
	ブラを捨て旅に出よう：貧乏乙女の“世界一周”旅行記	歩 りえこ	アメリカでノーブラ姿を見て、自由の象徴だと捉え、海外には日本にない自由があるのだと感じた筆者が日本にはない何かを求めて貧乏世界一周旅行を記録した本です。ドキドキハラハラしながら、一緒に旅行している気分になります。
山勢 善江	蒼穹の昴	浅田次郎	清代の中国を舞台とした歴史長編小説。貧しい家族のために自ら淨身し、宦官となって西太后の下に出仕する李春雲、一方その義兄で同郷の梁文秀は科挙を首席で合格し、官僚制度を上り始める。歴史小説としての壮大さと、宦官や科挙など中国の歴史の厳しさを知らされます。
	ヒトラーの防具	常木蓬生	東西ドイツを隔てていたベルリンの壁が崩壊したとき「贈 ヒトラー閣下」と日本語で書かれた、剣道の防具が見つかった。悪名高きヒトラーと日本で何が起こったのか。－真理は弱者の側に宿る－が本書のテーマです。
	科学者という仕事：独創性はどのように生まれるか	酒井邦嘉	本書でいう科学者とは、自然・人文・社会すべての科学を問わず、研究を通じ世に貢献する者をさしています。科学者にはどのような姿勢が求められるのか、先達の業績を例に挙げながら、易しく解説されています。
柳井 圭子	文系法医学者のトンデモ事件簿	南部さおり	医学と法学(刑法)の間には、深く暗いミゾがある!? と問う筆者は、法学部出身(法学修士取得)で医学博士を取得した法医学者です。世の中の事件はどのように処理されているのか(裁判を通して)ということを知る際、そこに医学の視点もあり、それぞれの見方があるのだと感じさせてくれる本です。
	汚名：「九大生体解剖事件」の真相	東野利夫	筆者の言葉です。「戦争は人を狂わせる。悲惨と愚劣しか残らない」と。医学生として立ち会った「九大生体解剖事件」。そこで何を見、何を思ったのか。そして本書は、恩師である教授に捧ぐとあります。そのえん罪を雪ぐためだと。
	東大現代文で思考力を鍛える	出口 汪	本書の帯には、「今を生き抜くための教養は、『東大現代文』に詰まっている」とのこと。本当かどうか、チャレンジしてみませんか? 「考え抜く力」が身につくそうです。
吉永 宗義	子どもの難問：哲学者の先生、教えてください!	野矢茂樹	生きるための素朴で根本的な問題に日本の一流の哲学者たちが答える。看護を行う上で常に自分に語りかける必要のある内容。
	「サル化」する人間社会	山極寿一	人間の社会性の本質に迫る、ゴリラ研究の第一人者の著書。私たち人間がどのように進化し、どのように生きていくべき存在であるかを示唆している。
	ピルグリム (1～3巻)	テリー・ヘイズ/著：山中朝晶/訳	読み応えのある諜報サスペンス。しかし9.11やイスラム、中東の状況などを背景にしながら書かれており、その実像を垣間見られる興味深い内容。